

論文

享和二年摂河大洪水と道頓堀の芝居小屋

斉藤 利彦

〔抄録〕

近世の芸能興行が娯楽や営利目的だけでなく、生活に対する救済・助成という面を持ち合わせ、一種の「社会的機能」を果たしていたことは、近世芸能史のみならず、近世史や地域史研究のうえからも、看過できない問題点である。

近世の芝居小屋の社会的機能について、享和二年（一八〇二）六月末から七月にかけて発生した摂河大洪水のおり、大坂道頓堀

の芝居小屋が果たした救済施設としての役割に関して検討することによって、近世社会における芝居小屋の社会的機能に関して考察し、あわせて、近世後期大坂の興行状況についても整理した。

キーワード 摂河大洪水、道頓堀、芝居小屋、救済小屋、社会的機能

はじめに

近世の芸能興行が娯楽や営利目的だけでなく、生活に対する救済・助成という面を持ち合わせ、一種の「社会的機能」を果たしていたことは、近世芸能史のみならず、近世史や地域史研究のうえからも、看過できない問題点であるのいうまでもない。

このような視点に対する研究は、はやくに、氏家幹人氏が金沢川上

芝居を中心に、東日本の城下町における為政者の興行官許の論理を明らかにしたことを皮切りに、竹下喜久男氏が美作国津山や紀伊国田辺における助成興行の解明を行ない、為政者による救済活動としての芸能興行の論理とその内実を明らかにされた。⁽²⁾ 後日、竹下氏は近世地域社会における芸能興行への視線、つまり、領主層、町方層、村方層、それぞれの階層による芸能興行に対しての理解と思惑について考察されている。⁽³⁾

また、橋本今祐氏は二本松領郡山宿を中心に助成興行の実態を指摘され、大國正美氏は在郷町伊丹に関して、神田由築氏は浜之市を事例に、芸能興行のもつ社会的機能や、それに関わる身分層などを明らかにされている。筆者も、和泉国堺での生活助成に関わる芸能興行を考察し、町や個人の生活救済に芸能興行が活用されたさまを明らかにした。

近世の芸能興行が社会的機能を果たしたことは周知のこととなったが、では、実際に興行を行なう「芝居小屋」は、こういった社会機能を果たしたのだろうか。

本稿は、近世の芝居小屋の社会的機能について、享和二年（一八〇二）六月末から七月にかけて発生した摂河大洪水のおり、大坂道頓堀の芝居小屋が果たした救済施設としての役割について検討することによって、近世社会における芝居小屋の社会的機能に関しての点描を試み、あわせて、近世後期大坂の興行状況についても整理するものである。

第一章 享和二年摂河大洪水とその概要

第一節 近世摂河地域と洪水災害

気候変動が歴史事象に与えた影響に関しては、世界史的にはアナール派のエマニュエル・ル・ロワ＝ラデュリなどによって言及されているが、日本近世の気候と歴史の研究は、根本順吉氏によって開拓された。いわゆる、歴史気候学である。また、水越允治氏の古記録からみ

た天候記録に関する研究も、看過できない重要な研究蓄積である。

近世日本は、気候的には「小氷期」にあたるが、この期間、小間氷期を繰り返しながら推移した。天明の大飢饉と天保の大飢饉の間、つまり、化政期は厳冬と酷暑という気候で、このような天候では、凶作はさけられる傾向にある、という。しかし、全国的には、大雨とそれによる洪水は絶えず繰り返された。これらの点は『日本旱魃霖雨史料』や『明治以前日本土木史』所収の史料からもうかがえる。

さて、近世の大阪府下地域に対し、もつとも激甚な被害をもたらした災害は、いうまでもなく、洪水水害である。中央日本から西南日本一帯の地域に共通する風水害をもたらす気象条件は、台風と梅雨期の集中豪雨が主な要素で、とりわけ、紀伊水道から大阪湾をへて淀川流域に至るコースは、そういった気流の経路のひとつと考えられていた。そのため、近畿地方ではかなりの頻度で、梅雨期の豪雨と台風による風雨が現れている。

大雨による淀川流域の洪水と破堤は、その流域に存在する村落に大きな被害をもたらした。淀川水系では、天正十八年（一五九〇）、正徳二年（一七一一）、享和二年（一八〇二）の水害が、近世の三大水害と呼ばれている。これらのうち、もつとも甚大な洪水被害をもたらしたのが、享和二年六月二十七日よりの大雨と洪水で、俗に「摂河大洪水」と称される。

当年六月二十七日から七月一日までの五日間、降り続いた大雨によって、淀川の堤防十九か所が決壊し、その延長は二・九キロにおよんだ。淀川右岸は、島上郡で五〇〇メートルに及んで堤防が決壊、高槻

城下まで水に浸かり、同左岸では、文祿堤の決壊をはじめ、点野切れ、仁和寺切れなど大規模な堤防破堤がおこったため、生駒山麓から平野郷までが浸水し、西成郡においては、堤防十一か所、長さ四五〇メートルも破堤、現在の大阪市内北区堂島、中之島辺りでは、七メートルも水没する被害をだしている⁽¹⁸⁾。

現在の市域で被害域を照合すると、右岸側は高槻市や島本町、左岸は守口・門真・寝屋川・枚方・大東・八尾・東大阪各市、大阪市内では臨海地域にあたる此花区に沿った西区九条・西淀川区野里・福島区海老江、先述した北区堂島・中之島などである。

享和二年の洪水につぐ被害をもたらした明治十八年（一八八五）の淀川洪水⁽¹⁹⁾では、決壊した堤防は一ヶ所、延長約一五〇メートルであったことと比較しても、また、現行の超過確率計算結果から推定すると、再現年限が四〇〇年であることを勘案しても、享和二年の淀川洪水が、如何に巨大であったかがわかり、この洪水の規模と被害の大きさをうかがうことができる。

第二節 享和二年摂河大洪水とその被害

「摂河大洪水」の実状は『大阪府史』第六巻をはじめ、被害域の市史などで整理されているが、論の展開上、本節において、その時間的推移などを確認しておきたい。

享和二年の六月は暑気が強く、米の作柄は良好と期待され、大坂の各神社の祭礼も、ことのほか賑やかであった、という。

とりわけ、二十五日からの天神祭は、山車が二十三台もくりだし、

祭りに彩りを添えた。同日の八ツ時頃より「北方格二て幽二雷鳴」り、雨が降り出したが、同祭の御輿渡りは例年通りに行なわれ、遊山涼船も多数でて、繁華であった。

しかし、人々が陽気に過ごせたのは二日ほどで、二十八日の八ツ時より「白雨篠をつく如く、風も不怪強」となり、寅刻まで吹き続け、しきりに風雨が強くなっていき、二十九日には強風をともない「車軸を流」すような大雨となる。この日は昼夜荒れ通しで、同日の暮れから、風は西に方向を変化させたが、強風には変わらなかった⁽²²⁾。

二十七日から二十九日にかけて、東海・関東地域も、同様の風雨に見舞われたが、大阪湾に高潮被害をもたらしていないことから、この風雨は梅雨前線を伴った大型台風が日本列島の太平洋沿岸沿いを北東にゆっくり進んだものと考えられている。つまり、雨台風であった。

ところで、二十七日朝、大坂三郷では、市中引き廻しのうえ、千日前にて獄門となった罪人が三人いたが、

所之神事宵宮祭ニ、ケ様成御仕置有之、右の穢ニて、ケ様二荒候哉等と一□ニ申上候、⁽²⁴⁾

とあるように、天神祭の宵宮当日に行なわれた死罪執行が穢れとなつて、天候荒天を招いた、と人々は考えたようである。

七月一日の午前中に降雨はようやく止み、晴天ものぞいたが、淀川の水位は当然のことながら「大水高ク」、水位は中流部で約四・二メートルまで上昇したため、その日の夜、淀川兩岸の各所で堤防が決壊した。

史料で、その内訳を確認してみると、つぎのとおりである。

一 淀堤二ヶ所 家居六軒流込、大樹数多流込
 一 淀 御城下不残、御家中屋敷・御本丸迄も水来る
 一 大橋 別条なし 一小橋 濊際にて十間余落込
 一 広瀬一ヶ所 四十間余流込
 一 上牧一ヶ所 三十間余流込
 一 前嶋八ヶ所 合三百三拾間余
 一 冠村四ヶ所 合二百四十間余
 一 大塚二ヶ所 合百三十間余
 一 東海道点野一ヶ所 百三十間余
 一 仁和寺二ヶ所 合百五十間余
 一 楠葉五ヶ所 合九十四間余 一 野田村 三十間余
 一 西野田新家二ヶ所 合三十八間余
 一 六軒家新田一ヶ所 拾間余
 一 野里一ヶ所 四十間余 一 申二ヶ所 合六拾間余
 一 福一ヶ所 三十八間余 一九条二ヶ所 三十八間余
 一 高浜六ヶ所 百四拾四間余
 一 上嶋下嶋宇山養父楠葉立会三ヶ所 六十九間余
 右切所四十三ヶ所 間数合凡千六百拾一間余⁽²⁶⁾
 被害地域は、前述したように広範囲に及んだが、摂津島上・島下・西成・東成・河内交野・茨田・讃良・河内・若江の九郡で二百三十七ヶ村、村高は「拾一万七千五拾石四斗貳合」⁽²⁶⁾にのぼった。
 被害を甚大にしたのは、「佐田・河州茨田郡しめ野村切口百三拾四間程、同郡仁和寺堤凡八九拾間計東へ切込」⁽²⁶⁾んだためであり、

梗並・八箇勿論、東ハ山の根、南ハ八尾・久宝寺・平野辺限り水押入、下地内水にて難儀之上、夜中ニ水押候故、家の棟々五六尺も有之所も有、或ハ軒切、又は床之上三四尺程上り候所もあり、家・蔵・田地・田畑押流し、人馬多く流死ス、⁽²⁷⁾
 とあるように、淀川左岸域の茨田・東成両郡、生駒山麓、八尾、平野郷までの一帯が水没し、多くの死者を出すこととなった。右岸側でも多くの被害をだし、高槻城も浸水する。

とりわけ、野田村や大坂三郷北組の網島町、備前島町は淀川・鯉江川・寝屋川三河が合流する地域であったため、

追々逃退候得共、東在々々逃来り候者とも夥敷入込罷在候、殊に夜中両方之橋は落候故、皆々途方ニ暮、女子・子供蚊のなくごとく大混雑にて、怪我人多有之候、⁽²⁸⁾
 という惨状となった。

茨田、東成両郡から京街道沿いに避難してきた人々が殺到したが、すでに野田橋、備前島町橋が落橋しており、人々は進路を断たれ、その界限は大混乱となった。

七月二日以降、大坂市中はより増水し、天満橋・天神橋・葭屋橋が落橋する。同日より、大坂町奉行所の救済活動が本格化するが、この点については後述したい。

翌三日には茨田・東成両郡の村民が、村々に滞留した濁水を排出するため、中野村上手の淀川堤防を「切二来る」ため「大勢徒党いた」す風聞が流れた。実際、同村堤防一帯の桜の宮あたりに、村民は集結する。⁽²⁹⁾もし、この場所を切られると、高水で破堤寸前にある対岸の源

八堤が決壊する恐れがあり、そうなれば、大坂三郷の天満組が濁流に呑まれることは必定であった。そのため、大坂町奉行所では、町奉行自らが村民の慰留に努めたが、村民たちは聞き入れようとせず、「竹鎗等用意」して、まるで「百性一騎」のようなありさまであったという。

町奉行は「堤を切二参り候体之物有」らば、「見付次第第二召捕、入牢」させるとし、「昼夜御役人方同勢三四百人相詰」め、「鉄砲百挺計筒先を揃」え威嚇し、退散させたものの、数日間は緊迫した状況が続いた。⁽³⁰⁾

四日、旅行中の曲亭馬琴は、京都木屋町の宿屋で、角倉家中の森氏より「摂州河州洪水の風聞」を聞くが、情報は錯そうしていたようである。同日段階で「天満橋天神橋その外五ヶ所落たりといへど。いまだ通路なければ治定しがた」く「大坂への通路もな」い状態で、この日、馬琴が清水寺から伏見方面をみると、「八わた山崎水一面にして只真白に見」えるありさまであったという。⁽³¹⁾

五日になると水は引きはじめ、大坂町奉行所、堤奉行などの見分が始まり、また、復旧作業も本格化する。

同月十七日、大坂町奉行所では施行船の調達を中止し、仮設小屋の避難民の帰村をうながす、つぎのような触もだされ、避難村民の帰村が順次はじまった。

同十七日御触

中略

一当表迄立退来候水難之者共、三郷内ニ親類・知音等も無之及難

義候ハ、見懸候町々台いたわり、食事等施可遣旨一同申触させ候所、神妙相守、水難之者明借家等ニ差置遣し、いたはり置候町々も有之段、是又奇特之事ニ付、令称美候。勿論一旦之飢渴相救、御代官・領主・地頭 hands 当も有之候義ニ付、奉行所にて御救小屋ニ差置候者共ハ、追々村方へ差返候條、町中二いたわり置候者共義も、勝手次第帰村いたさせ可申候、⁽³²⁾
右之趣、惣年寄口達を以可申候。

ただし、「二十日ばかりにして水ようやう減」じ始めたので、実際の帰村は二十日あたりからだが、二十三日までは、昼夜もわからないほどの混乱は続いたようである。⁽³³⁾

第二章 救済施設としての芝居小屋

第一節 洪水被害と施行

前述したように、摂河大洪水の際、七月二日の段階で、被害を受けた摂津・河内の村民が避難するため市中へ流入した。同時に、天満橋などが落橋するなどし、市中は大混乱となり、

水ニ而迷惑ひし百性、高き堤ニ上り小屋掛いたし居ける。又中にもますしき者ハ京橋辺迄さまよひ、或ハ野宿いたし居候者共、嶋之内松原町のり吉と申手伝職之者御上江願上、京橋土手下浜側ニ小屋かけ致し入申候。⁽³⁴⁾

とあるように、堤防の上に仮設小屋を設ける者、京橋あたりを流浪する者、野宿する者などがあらわれはじめた。

大坂町奉行所も公事訴訟の業務を一切停止し、市中に流入した避難民対応に最大限に尽力する。まず、上町地区の空き借屋や馬場、京橋の仮設小屋に避難民を収容すると同時に、急触れを発し、施行を呼び掛けつつ、様々な種類の船を徴発、「施行船にて遠方之在々へ為持運」⁽³⁵⁾させるなどして救援活動を行なった。

救援船については、

七月二日分十日迄、日々に船数百五十艘ツ、御役船相勤、同十一日分晦日迄、日々四五艘ツ、御国役相勤、猶又枚方分点野村切所迄土俵積下り候御役船、日々に五拾艘ツ、相勤候事。⁽³⁶⁾

とあるように、町奉行所は徴発した船によって、大規模な救出作業を展開している。

あわせて、施行は、

当表迄立退罷越候在方之者共、三郷内ニ親類・知音等も無之、及難儀候者有之候ハ、是亦見掛け候丁々ニおゐていたわり、食事等施行致可申事。⁽³⁷⁾

といった具合に、同奉行所から避難民に対する救済が申し込まれ、「七月二日夕方分、大坂三郷町々分食事給物・諸品施行物行事夥敷」⁽³⁸⁾しく届けられた。一例をあげると、

藁紙一折宛、団一本ツ、わら草履一足宛、葉一袋、握飯、菜之物、半紙、当竹、させる、手拭五百筋いろは、友吉、岩ノ吉、右三人分、米二俵歌右衛門、銭拾貫文為十郎、子供腹当心斎橋三雲屋、⁽³⁹⁾

といった品々であり、様々な生活用品が寄せられたことがわかる。こ

のほかに、金百二十両、銀五貫八百九十目、銭一万四千八百八十一貫文米三百四石、五百七石、餅四百六十八石、麦百三十二石なども届けられた。とりわけ、歌舞伎関係者からは、三代目中村歌右衛門が米二俵、浅尾為十郎は銭拾貫文を寄付している。歌右衛門・為十郎ともに、直近の六月は京北之芝居に出勤していた。⁽⁴⁰⁾

曲亭馬琴は、京都において、大坂での惨状を聞き知ったが、「十人これを語れば十人大同小異」であるものの、「只聞しよりまされるものは大坂の施行のみ」と語っている。⁽⁴¹⁾

彼の入手した情報によれば、

大坂中の豪商或は一町／＼に組合にて施行を出す。或は米五十俵銭百五十貫文。或は単物五百。襦袢千枚身上の分限によりて差あり。⁽⁴²⁾

といった施行が行われたことがわかる。

彼は『羈旅漫録』で、この水害を克明に記しているが、そのなかでも、

四五日経てよう／＼大坂の通路あり。しめ野堤きれて河内へ水おし入。水損の農民は道頓堀の芝居へいれおかれ、大坂中の豪家或は一町／＼に組合て施行を出す。⁽⁴³⁾

と、道頓堀の芝居小屋へ避難民を収容した、と記している点は注目しなければならない。

第二節 「御救ひ所」道頓堀の芝居小屋

大坂町奉行所は市中に流入した避難民対策として、「松ノ下・馬場

等処々」に御救小屋を建設した。

京ばし松の下二小屋を建、東在る逃来り、当処二親類・知音等無男女・子供二至迄一所二入置、御役人付添。昼夜見廻り、食物等遣しいたわり置候人数六七百人計、誠二難有御仁恵也⁽⁴⁴⁾。

しかし、被害流域が広大であり、避難民は膨大であったことから、「逃おくれ居候老若男女」が「夫二ても人余」る状況であった。

そこで大坂町奉行所は「道頓堀芝居へ被仰付、御入らせ」ることにし、

逃おくれ居候老若男女、御役人之差図ヲ以通船ニて迎ニ参り、道頓堀芝居へ不残入置、御役人度々見廻り、諸事従公儀御賄ニて救被遣候⁽⁴⁵⁾。

といったように、逃げ遅れ、他のお救い小屋に入られなかった者たちを施行船で救出、そのまま、道頓堀の芝居小屋に収容している。

『近來年代記』巻五にも、

○芝居百性養育

右之水二而逃迷ひし百性、高き堤二上り小屋掛いたし居ける。又中にもますしき者ハ京橋辺迄さまよひ、或ハ野宿いたし居候者共、嶋之内松原町のり吉と申手伝職之者御上江願上、京橋土手下浜側二小屋かけ致し入申候、又御公儀令ハ道頓堀惣芝居へ仰被渡、下百性之ともから、老人・女・わらへ之者養育可致由、四、五日比之芝居へ夫々分て御救ひ所と書附之灯燈出し⁽⁴⁶⁾、とあって、芝居小屋を明確に「御救ひ所」とし、そのように書き記した提灯を出したうえ、老若男女を収容させたことが確かめられる。

馬琴も前掲書に、

又道頓堀の雜劇五ヶ所あり。一は当時その破損を修理してあり。中に流氓を入おかる。氓集るもの四千人。則庫を発してこれに資給し給ふ⁽⁴⁷⁾。

と、避難民は芝居小屋に収容され、物資配給がなされたと書き記している。

つまり、未曾有の大洪水という危機的状況のなかで、道頓堀の大芝居は「御救い小屋」という救済施設として避難民を収容するという、社会的機能を果たした、といえるのである。

「御救い小屋」として活用された芝居小屋は、中之芝居が普請中であつたことから、当芝居は除外され、竹田芝居、若太夫芝居、角芝居、角丸芝居、大西芝居の五軒であつた。

中之芝居の直近の興行は、五月六日初日の興行で、そのつぎに確認できるのが、九月十四日初日の興行である⁽⁴⁸⁾。仮に、五月六日から一か月興行があつたとしても、この水害直前までであり、その後、普請にはいったため、洪水時は使用不能な状態であつたのであろう⁽⁴⁹⁾。

他の五芝居が興行中であつたかは、当時の興行状況をしめす史料が欠ける傾向にあるため不明だが、大西芝居は洪水直近の興行は明瞭ではないが、四月二十八日より三ノ替興行が行われている。須崎氏の考察では、九月七日よりの興行の前に月日不明であるが、「献上毛錦綴」の興行があることから、洪水時はこの興行があつたか、終わつていたところと推測される。若太夫芝居は同年の興行の絵尽くし・役割番付などは確認できないものの、浄瑠璃興行は四回行われている⁽⁵⁰⁾。ただ

し、洪水直近の興行は認められない。しかし、七月三十日・八月二十三日の興行があつて注目できるが、この点については後に述べることにしたい。

享和二年度の竹田芝居の興行で月日が明確なのは、『役者宝舟』にある顔見世興行のみで、このほかに絵尽くしが二冊確認できるが、一種は版元「立花や丑松」の『近江源氏 思花街容性』、もうひとつが同版元からの『忠孝督二街 おそめ久松』である。⁽⁵⁵⁾ともに年次の記載はないが、須山氏はこれら絵尽くしにある興行は、同年度の顔見世興行後のものと推定されている。⁽⁵⁶⁾この指摘を含め、これらの興行は二ノ替、三ノ替の可能性もあり、洪水時とは言い難い。そのつぎに認められるのが、享和三年正月吉日板の評判記『役者弓始』であるので、現在、管見できる史資料からは、洪水時に興行していたかどうかは確定できない。

角丸芝居については、詳細は判然としない。角芝居は同年五月七日から十七日まで、座本姉川亀三郎「在原景図」「平家女護島」がかけられていた。⁽⁵⁷⁾この一座は同月二十五日初日の北新地芝居に引越しているため、⁽⁵⁸⁾同芝居は、洪水時は興行はなされていなかったと考えられる。このことが後述する避難村数の多さと関係しているのだろうか。

さて、大坂町奉行所は、七月二日より、市中で施行をうながし、市中に流入した避難民を、「中之芝居ハ普請」中であるので「残り五芝居へ」「思ヒ付次第芝居迄はこ」⁽⁵⁹⁾びいれた。

避難民はそれぞれの芝居小屋に、つぎのような村別で収容されている。

竹田芝居

蒲生村・野江村・今里村・下之辻・中井村・四番村

若太夫芝居

今福村・下之辻村・二番村・三ヶ村・赤井村・横市村

角丸芝居

赤井村・関目村・大今里村・蒲生村

角力芝居

三ヶ村・三嶋村・樋之村・門間四番・水野村・磐若寺村・野里村・下六番・本庄村・野田村・伏見坂丁三ヶ所・大川・長戸村・せいき村・ひへ嶋・金田村・今福村・芝仁村・八丁新田・大枝村・高井田・下之辻・浜村・赤井村・内土村

大西芝居

渚村・野田村・蒲生村・馬場むら・鳴のむら・太子田・中浜むら・東今里・三ヶ村・御領むら・四番村・榎並中村・野江むら・下之辻・赤井むら・磐若村・横市村・東今福⁽⁶⁰⁾

竹田芝居・若太夫芝居が六カ村、角力芝居は二十五カ村、大西芝居については十八カ村、四芝居で合計五十五カ村の避難民を収容した。

芝居小屋への収容は何か法則性をもつて、あるいは方針をもつてなされたのだろうか。各芝居小屋に割り分けられた村々を通覧してみると、竹田芝居は東成郡の村がおおよそをしめるが、そのほかの芝居は郡ごとの傾向はない。

町奉行所は避難民を「思ヒ付次第芝居迄はこ」び収容した模様だが、混乱と惨状のなかでは当然のことであろう。ただし、芝居小屋ごとに

収容した村名が判明していることは、村ごとのまとまりをもって、一定度は収容したと判断でき、救済船が村単位で救助活動を行ったことがえる。

各芝居小屋が、どれだけの人数を収容したのかについては確かではないが、

毎日く入替り、凡五芝居にて頂重ハ千五、六百人、毎日飯米米三石余り程ツ、御公儀令日本橋大嘉江米御遣シニ而、所々ニ而是を飯ニ焚百性ニあたふ。⁶¹

とあったり、あるいは、

御役人之差図ヲ以通船ニて迎ニ参り、道頓堀芝居へ不残入置、御役人度々見廻り、諸事従公儀御賄ニて救被遣候。但し、中之芝居ハ普請中ニ而、宿不致候。右人拾千三百人程之由、⁶²

と記すことから、四芝居小屋合計で、千三百から千五百、六百人が避難したとかがえる。

一方、「菊屋町旧記」には、

右切所ニ而水入

河州 交野郡 茨田郡 讃良郡 若江郡

摂州 島上郡 川辺郡 東成郡 西成郡

右村々之内御料所之分 貳百七ヶ村

但シ、私領之分者未委細之断無之分。

右水入之村々大坂江逃出、又ハ助け船差遣し危難を救、大坂京橋松之下飯小屋、併道頓堀芝居五カ所二当分差置、夫食ニ遣候人数

仮小屋之分 六百七拾六人

芝居之分 千九拾六人⁶³

と、道頓堀の四芝居への避難民収容人数を千九十六人としており、かなり具体的な数字を記している。

このような数値の相違は、おそらく、混乱と避難民の多さからくるものであり、正確なものではこないであろうし、当然、避難民の増減などがあつたとも考えられる。平均してみると、一軒の芝居小屋に三百人前後が収容されたと考えられるが、竹田・若太夫芝居が六カ村であるのに対し、角力・大西芝居は三々四倍の村を受け入れているので、収容人数には若干の差がでてこよう。

芝居小屋には、大坂町奉行所より毎日飯米三石が下賜され、それが日本橋の大嘉に遣わされたうえ、「所々ニ而是を飯ニ焚」いて配布された。また、

茶水ハとうこニ而焚、又新しき風呂ニ而湯をわかし、行水をさす。

一芝居ヒ風呂二本、三本宛焚、⁶⁴

とあるように、飲料水の配布だけでなく、芝居小屋一軒ごとに「風呂二本、三本宛焚」かれ、避難民に行水させている。これは衛生管理面での処置といえ、伝染病の防止などに努めている、といえよう。

このように、道頓堀の芝居小屋が救済施設としての社会的機能を果たしたことは間違いない。仮設小屋の建設が、時間的にも、場所の確保という面でも、そして、収容人数からしても間に合わない状況のなかで、芝居小屋は大規模木造建築であり、いつとくに大人数を収容できる施設であることから、また、川に接しており、施行船で収容しや

すいことなどから、救済施設として活用されたのであろう。

大坂町奉行所の処置は、未曾有の大洪水のなかで、大坂町奉行所の臨機応変な対応として評価できよう。

第三節 興行の再開

洪水の避難民の順次帰村などは十七日あたりからはじまるが、御救い小屋として避難民を収容した芝居小屋は、いつ頃から興行を再開したのであろうか。

この時期の道頓堀の芝居町の興行状況については、須山章信氏の詳細な研究があるものの、興行の実態は極めて不明瞭であり、再開時期をたどることは難しい。

曲亭馬琴は七月二十四日より八月五日まで大坂に逗留したが、『鞆旅漫録』のなかに、

大坂洪水後にして、芝居いまだはじまらず。道頓堀の大芝居は間口京の芝居よりもひろし。その中芝居なども、大芝居のごときものあり。あやつりと中芝居は興行せり。八月初旬にいたりて、道頓堀角の芝居に看板あがる、浅尾為十郎、藤川十蔵、大谷友右衛門、中山一徳、友吉などみえたり。八月十五日ころ初日ならんといへり。⁽⁶⁵⁾

とあり、角の芝居が八月中旬より興行を再開したと伝えている。

役割番付では、八月十二日より、座本姉川亀三郎で「契情花発船」が上演されていることから、馬琴の伝えているとおり、興行は始まったといえる。

また、馬琴は「あやつりと中芝居は興行せり」というが、このあやつりとは、先述した若太夫芝居のことであろう。七月三十日より、座本竹沢吉太郎、太夫竹本政太夫で、「太平記菊水之巻」「敵討檻樓の錦」「楠昔噺」「金毘羅御利生稚物語」などが上演され、翌月の八月二十三日にも「太平記菊水之巻」「双子隅田川」「加々見山田錦絵」「楓狩剣本地」「児源氏道中軍記」が興行されている。⁽⁶⁷⁾最も早期の興行再開である。竹田芝居・大西芝居ともに、役割番付その他から、享和二年の興行は不明瞭で、洪水後の興行がどうであったかは不明である。⁽⁶⁸⁾

四芝居のなかで、若太夫芝居が洪水後、一か月足らずで興行を始めているのは、避難民は六カ村であったということも関係しているのではない。角之芝居は二十五カ村であったことから、単純に考えても、若太夫芝居よりも避難民は多かったといえ、その後始末などに時間がかかったともいえる。

おわりに

以上、近世の芝居小屋の社会的機能を、享和二年の摂河大洪水時のお救い小屋として活用されたことを事例に考察を試みた。

近世における芸能興行が娯楽や営利目的だけでなく、生活救済・助成という面を持ち合わせていたことは、すでに明らかにされてきているが、興行が実際に行われる芝居小屋に関しては、従来、言及されることはなかったといえる。

今回の検討事例は、たった一件という制約はあるものの、未曾有の

水害時に、大規模木造建築物であり、いつときに大人数を収容できる施設として活用されたことは、芝居小屋の社会的機能を考えるうえで、その内容を点描することはできたのではないか。

また、享和二年のみであるが、従来、判然とはしていない近世後期の大坂の興行状況について確認した。洪水直近から再開までという限られた期間を対象とした微小な検討であるが、中の芝居の普請前と興行再開、角の芝居の興行再開の特定などはできたといえる。

最後に、今後の課題をまとめた。

今回の考察は芝居小屋のもつ社会的機能を、一事例のみで検証したものであり、まさしく素描といえるものである。したがって、全国的に事例を掘りあげ、多数の事例を検討しながら、どのような機能を果たす側面があったかを、考究する必要がある。このような点を考慮しながら、今後、検討を加えていきたいと考える。

〔注〕

- (1) 氏家幹人「在方興行の成立と背景―近世後期における芝居公許の論理―」(津田秀夫編『解体期の農村社会と支配』校倉書房、一九七八年)。
ほかに、同「近世後期における在方興行の社会的要因」(『芸能史研究』六七号、一九七九年)、同「在方遊芸の展開と社会的要因―甲州東山梨郡Y家の遊芸活動と若者集団―」(『芸能史研究』七二号、一九八〇年)、同「近世後期地方社会における諸芸と情報―会津藩郷頭田中家にみる「諸芸の家」の記録―」(『芸能史研究』八二号、一九八三年)。
(2) 竹下喜久男「近世後期津山とその周辺の他所芝居興行」(『鷹陵史学』十号、一九八五年)、同「紀州田辺領における芸能興行について」(『佛教学研究紀要』七二号、一九八八年)。いずれものちに、同「近世地

方芸能興行の研究」(清文堂、一九九八年)に所収。

- (3) 同右著書所収「地方興行に関する意見」。

- (4) 橋本今祐「地方芸能興行市場の形成と町人の動向―二本松領・郡山宿を中心として」(『芸能史研究』一二三号、一九九三年)など。

- (5) 大國正美「近世伊丹における興行と町政の成熟―在郷町の大衆芸能と自治への関心から―」(『地域研究いたみ』二二号、一九九三年)、同「近世伊丹における相撲興行の展開と民衆―在郷町の享楽の「場」と「人」をめぐる―」(『地域研究いたみ』二三号、一九九四年)。

- (6) 神田由築「近世芸能興行と地域社会」(東京大学出版会、一九九七年)。
(7) 拙稿「補論―近世堺と助成興行」(『近世上方歌舞伎と堺』思文閣出版、二〇一二年)。

- (8) 竹下氏も指摘しているが、越前敦賀町の芝居小屋の座元笹屋次郎兵衛は、文久三年(一八六三)、老朽や地震による大破などで傷んだ芝居小屋の建て替えを願い出ているが、そのおり、敦賀三十六町に一軒一枚宛の通り札購入を願い出ている。町方への助成による建て替え資金捻出を試みようとしていることがうかがえる。この背景には個人所有の芝居小屋ではあるが、長年の興行によって、同町繁栄に貢献した「公的施設」という意識を察することができるが、このような事例も芝居小屋の社会的機能を考えるうえで注目しなければならないであろう。

- (9) エマニュエル・ル・ロワラデュリ『気候の歴史』(藤原書店、二〇〇〇年)、同『気候と人間の歴史・入門―中世から現代まで―』(同、二〇〇九年)。

- (10) 「歴史気候学の進展―江戸小氷期と飢饉―」(週間朝日百科『日本の歴史』87 近世2―10 浅間の噴火と飢饉、一九八七年)。

- (11) 同右。古気候学も歴史気候学と関連する学問領域である。古気候学は過去の気候を検討する学問として地史学の一部として認識されることもあるが、基本は気候学と近似し、全地球的な検討のため、諸学問と密接に関係している学問分野である。

また近年、注目される研究としては総合地球環境学研究所の「高分解

能古気候学と歴史・考古学の連携による気候変動に強い社会システムの探索」気候適応史プロジェクトの研究成果をあげておきたい。

- (12) 水越允治・山下脩二『気候学入門』（古今書院、一九八五年）、水越允治編『古記録による11世紀の天候記録』（東京堂出版、二〇一四年）、同編『古記録による12世紀の天候記録』（同、二〇一二年）、同編『古記録による13世紀の天候記録』（同、二〇一〇年）、同編『古記録による14世紀の天候記録』（同、二〇〇八年）、同編『古記録による15世紀の天候記録』（同、二〇〇六年）、同編『古記録による16世紀の天候記録』（同、二〇〇四年）など。
- (13) 荒川秀俊、大隅和雄、田村勝正編、気象庁監修『日本旱魃霖雨史料』（クレス出版、二〇〇二年）。
- (14) 土木学会編『明治以前日本土木史』（土木学会、一九三六年）。のちに復刻本が岩波書店より一九七三年に出版されている。
- (15) 河田恵昭「摂河水損村々改正図」（『予防時報』二四二号、二〇一〇年）。
- (16) 水越允治「京都における歴史災害とその気象・気候的背景」（『京都歴史災害研究』第一号、二〇〇四年、立命館大学COE推進機構 立命館大学歴史都市災害研究センター 京都歴史災害研究会）
- (17) 同右。
- (18) 前掲注15に同じ。
- (19) 同右。また、植村善博・小林善仁・木村大輔・遠藤美奈・山中健太・浅子里絵・杉山純平・三宅智志・山下博史「木津川・宇治川低地の地形と過去400年間の水害史」（『京都歴史災害研究』第七号、二〇〇七年、立命館大学COE推進機構 立命館大学歴史都市災害研究センター 京都歴史災害研究会）及び、浅井良亮・大邑潤三・植村善博「京都市淀、水垂、大下津地域における治水・水害史と淀川改良工事」（同十四号、二〇一三年）、片山正彦「明治18年の淀川洪水と北河内…現門真市域を中心に」（同十八号、二〇一七年）参照。
- (20) 前掲注15河田氏論考及び同右、浅井良亮・大邑潤三・植村善博論考。
- (21) 大阪府史編纂委員会編『大阪府史』第六卷 近世2（大阪府、一九八七年）。また、服部敬「享和二年の洪水と淀川改修運動」（『市史紀要』七号、二〇〇〇年）など。
- (22) 大阪市立中央図書館市史編集室編『大阪編年史』第十四卷（大阪市中央図書館、一九七二年）四〇六頁。
- (23) 気象研究所編『日本高潮史料』（吉川弘文館、一九六一年）。
- (24) 前掲注22に同じ。
- (25) 大阪市史編纂所編『年代記』巻五（大阪市史史料第三十一輯 大阪市史料調査会、一九九一年）九二頁。
- (26) 前掲注22、四〇七頁。
- (27) 同右。
- (28) 同右。
- (29) 前掲注22、四〇八～四〇九頁。
- (30) 同右。
- (31) 『羈旅漫録』（日本随筆大成編輯部編『日本随筆大成』第一期一、吉川弘文館、一九七五年）二〇〇頁。
- (32) 前掲注22、四一三～四一四頁。
- (33) 前掲注31、二四六頁。
- (34) 前掲注25、九五～九六頁。
- (35) 前掲注22、四〇八頁。
- (36) 前掲注22、四二八頁。
- (37) 前掲注35に同じ。
- (38) 同右。
- (39) 前掲注25に同じ。
- (40) 京北之芝居風三吉座にて共演している。
- (41) 前掲注31に同じ。
- (42) 同右。
- (43) 同右。
- (44) 前掲注35に同じ。
- (45) 同右。
- (46) 前掲注34に同じ。
- (47) 前掲注31、二四六頁。

(48) 池田文庫所蔵役割番付

(49) 右同。

(50) 普請中の中芝居については、竹下喜久男『近世地方芸能興行の研究』(清文堂、一九九八) 参照。

(51) 須山章信「寛政・享和年間大坂中芝居の興行について」(『青須我浪良』第三五号、一九八八年)。

(52) 正月二九日、七月三〇日、八月二三日、十月二二日(『義太夫年表』)

(53) 前掲注51に同じ。

(54) 同右。

(55) 同右。

(56) 同右。

(57) 『歌舞伎年表』第五卷、三二七頁。

(58) 同右、三二七～三二八頁。

(59) 前掲注25、九六頁。

(60) 同右。

(61) 同右。

(62) 『享和二年摂河東在々洪水之一件』(『大阪編年史』大阪市立中央図書館、一九七二年) 四〇二頁。

(63) 前掲注22、四二六頁。

(64) 前掲注59に同じ。

(65) 前掲注33、二七八頁。

(66) 前掲注52に同じ。

(67) 同右。

(68) 前掲注51に同じ。

〔付記〕

本稿は歌舞伎学会平成二六年度秋季大会で口頭発表した内容に加筆修正したものである。席上、貴重なご助言などを頂戴した。謹んで、お礼申し上げます。

また、植村善博先生より、ご教示と激励を頂いた。お礼申し上げます。

(x)いとう としひこ 歴史文化学科)

二〇二〇年十一月十六日受理

